

飼い猫による咬傷、搔傷後に発症した蜂窩織炎の3例

村田 純子, 松村 和子

札幌社会保険総合病院 皮膚科

飼い猫による咬傷、搔傷後に発症した蜂窩織炎3例を経験した。2例から *Pasteurella multocida* を検出した。うち1例は40度台の高熱をきたし、検出菌はCCL、CLDM耐性であった。ネコ咬傷はその牙の構造が細く鋭いため、見かけ上創は小さくとも、容易に深くまで及ぶ。関節や骨まで達して感染がおよぶことがあり慎重な対応が必要である。ペットブームに伴い増加が予想されるため、十分な啓蒙を要する。

はじめに

Pasteurella 感染症はイヌ・ネコなどのペットから感染することの多い人畜共通感染症である。近年のペットブームに伴いその報告数も増加しており、注目されてきている。当科でも2004年1年間で *Pasteurella* 感染症、またはその可能性が濃厚であった症例を3例経験したので報告する。

症 例

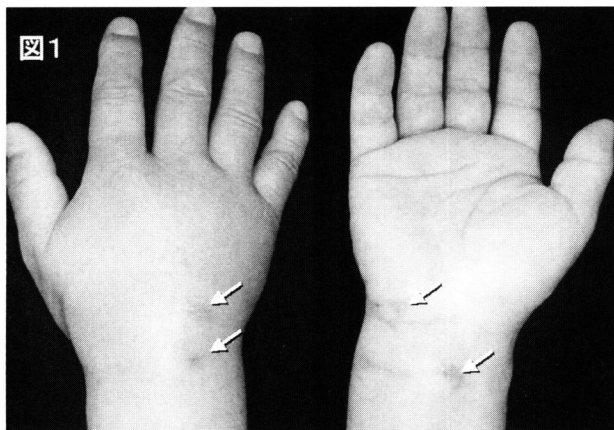
症例1：53歳、男

主訴：右手の発赤・腫脹

既往歴：特記すべきこと無し

現病歴：当科初診の2日前に飼い猫に右手数箇所を咬まれ、徐々に右手の発赤・腫脹が出現。平成16年8月4日当科外来受診した。

初診時現症：右手背、手首に数箇所咬傷痕を認め、



症例1：右手のびまん性の発赤・腫脹。左手背、手首に咬傷痕を認める。

右手はびまん性に腫脹していた（図1）。

初診時検査所見：WBC 9980/ μ l、RBC 454万/ μ l、Hb 14.8g/dl、Plt 20.7万/ μ l、CRP 6.2mg/dl

咬傷部浸出液の細菌培養検査で *Pasteurella multocida* が検出された。

薬剤感受性：アンピシリン（ABPC）：感受性あり（以下S）、セファクロル（CCL）：S、セファタキシム（CTX）：S、ラタモキシフ（LMOX）：S、クロラムフェニコール（CP）：S、トスフロキササン（TFLX）：S

治療と経過：セファクロル750mg 内服開始し、10日後には発赤・腫脹は改善した。

症例2：23歳、女

主訴：発熱、四肢の紅斑・腫脹

既往歴：特記すべきこと無し

現病歴：当科初診の約2時間前、四肢に飼い猫から10ヶ所以上の咬・搔傷を受けた。平成16年9月3日当科外来受診。

初診時現症：四肢10ヶ所以上に咬・搔傷が存在。咬傷部位中心に発赤、腫脹、熱感を認めた（図2）。

初診時検査所見：WBC 13640/ μ l (nue 83.9%)、RBC 414万/ μ l、Hb 11.4g/dl、Plt 29.9万/ μ l、CRP 0.0mg/dl、GOT18IU/l、GPT14IU/l、LDH 125IU/l、 γ -GTP14IU/l、CHE412IU/l、BUN10.6mg/dl、Cre0.53mg/dl

咬傷部浸出液の細菌培養検査で *Pasteurella multocida* が検出された。

薬剤感受性：ベンジルペニシリン（PCG）：S、セ



図2 症例2：四肢の複数の咬・搔傷痕。

ファゾリン (CEZ)：S、セファクロル (CCL)：感受性なし (以下R)、セフォゾプラン (CZOP)：S、アミカシン (AMK)：S、クラリスロマイシン (CAM)：S、クリンダマイシン (CLDM)：R、オフロキサシ (OFLX)：S

治療と経過：Pasteurella 感染症を疑いセファクロル1500mg/day 内服を開始した。しかし2日後には40度台の発熱、全身倦怠感が出現し、局所の炎症症状も増悪したため当科再診。再診時WBC 9100/ μ l (nue 85.9%)と減少認めたものの、CRP 3.7mg/dlと上昇していた。同日当科入院し、塩酸セフォゾプラン1g \times 2点滴静注を開始。開始後2～3日で四肢の紅斑・腫脹が改善し、下熱も認めた (図3)。6日後には感受性のあるレボフロキサシ400mg/day 内服に変更し当科退院した。退院6日後には紅斑・腫脹消失し、内服終了とした。

症例3：84歳、女

主訴：左手の腫脹

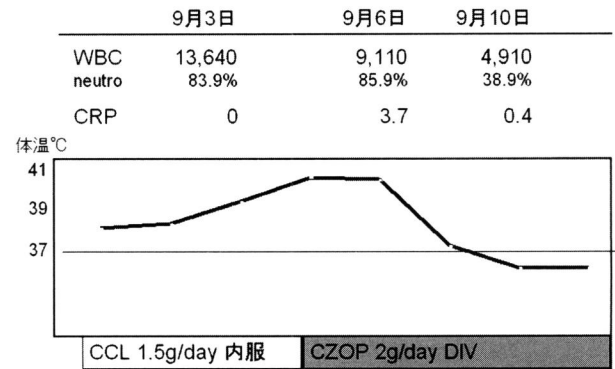
既往歴：胃潰瘍、右単径ヘルニア、蜂窩織炎、子宮筋腫

現病歴：当科初診の5日前に飼い猫に左手首を咬まれた。翌日から近医でレボフロキサシ300mg/day 内服とイミペネム・シラスタチンナトリウム0.5g/day 点滴静注で加療されていた。しかし、左手の発赤と腫脹が改善しないため平成16年10月14日当科を紹介され受診した。

初診時現症：左手背に2箇所咬傷痕を認め、咬傷痕周囲はびまん性に紅斑、腫脹、熱感が存在した。

初診時検査所見：WBC 6010/ μ l (nue 76.0%、lym 17.1%、mono 4.8%、eos1.3%、bas 0.8%)、

図3



症例2：臨床経過図

RBC 357万/ μ l、Hb 10.7g/dl、Plt 24.5万/ μ l、CRP 3.29mg/dl、GOT25IU/l、GPT13IU/l、LDH184IU/l、 γ -GTP28IU/l、CHE239IU/l、BUN11.0mg/dl、Cre0.60mg/dl

咬傷部浸出液の細菌培養検査では細菌は検出されなかった。

治療と経過：Pasteurella 感染症を疑い、当科入院の上セファゾリンナトリウム1g \times 2点滴静注を開始。8日後には紅斑・腫脹・局所熱感が改善した。退院し、その後塩酸セフカペンピボキシル300mg/day 内服に変更。内服開始7日後にも紅斑、圧痛が軽度残存したためクラリスロマイシン400mg/dayにさらに変更。変更7日後には紅斑、圧痛も軽快した。

考 察

ネコ咬傷はその牙の構造が細く鋭いため、見かけ上創は小さくとも、容易に深くまで及ぶ。関節や骨まで達して感染することもある¹⁾ため、慎重な対応が必要とされる。

ネコ咬傷後の感染症としてPasteurella 感染症と鑑別を要するものにBartonella 感染症 (ネコひっかき病)がある。Bartonella henselaeが起因菌であり、ネコによる咬・搔傷受傷後1～2週間後と亜急性に受傷部位に丘疹、膿疱、水疱、結節や潰瘍を生ずる。所属リンパ節は受傷後約2週間後に腫脹する^{2) 3)}。そのため、ほとんどは臨床的に鑑別可能である。診断は血清抗体価測定 (蛍光抗体間接法や酵素抗体法)あるいはPCR法での菌の同定による¹⁾。本症例は3症例とも搔・咬傷受傷後比較的すぐに発赤・腫脹などの症状をきたしたことより、第一に

Pasteurella 感染症を考えた。

Pasteurella 感染症は最近のペットブーム、高齢化や核家族化に伴い増加の一途をたどっている人畜共通感染症である。*Pasteurella* 属菌は哺乳類、鳥類の消化管に常在するグラム陰性桿菌で、本邦ではネコで約70%、イヌで約20%が保有し、とりわけネコの保有率が高い⁴⁾。血液寒天培地上、18～24時間と短時間の培養でムコイド状のコロニーが形成される⁵⁾。感染症の起炎菌は大部分が *P. multocida* である⁵⁾。通常ほとんどの抗生剤に感受性があり、ペニシリン系、セフェム系、テトラサイクリン系の抗生剤投与が有効である⁴⁾。しかしながら、耐性菌の出現も近年問題となっており、第一世代セフェム系の耐性も報告されている⁵⁾。糖尿病などの基礎疾患を有する場合や高齢者では、敗血症や髄膜炎などの全身感染症を引き起こすこともあり、注意を要する²⁾。自験例も耐性菌による症例2、高齢者に発症した症例3では重症化の可能性を考慮する必要があった。

近年ヒトとペットとの関係は益々濃厚となっており、今後も日常診療においてネコやイヌによる咬・搔傷に遭遇する場面は多いと考えられる。ネコやイヌによる咬・搔傷を診察する際には本症を常に念頭におき、創が小さいにもかかわらず重症化することがあるので適切な検査、処置、治療をこころがけるべきである。

参考文献

- 1) 蛭田志真子ほか：皮膚病診療 24：381－384、2002
- 2) 原 弘之ほか：皮膚病診療 25：615－620、2003
- 3) 福丸圭子ほか：皮膚病診療 25：629－632、2003
- 4) 荒島康友ほか：感染症誌 60：311－314、1986
- 5) 原 弘之ほか：臨皮 54：25－29、2000

Three cases of cellulites after domestic cat scratches and bites

Junko MURATA, Kazuko MATSUMURA

Department of Dermatology, Sapporo Social Insurance General Hospital

Pasteurella multocida is a small nonmotile gram-negative coccobacillus. It is part of the normal oral flora of many wild and domesticated cats and dogs. The clinical manifestation of human infections with *P. multocida* is most often cellulites and localized skin abscesses. We also sometimes find *P. multocida* from cat and dog bite wounds. We have reported three cases of cellulites after cat scratches and bites, two of them caused by *P. multocida*